

蝮のすゑ

映画文学人生論

原作：武田泰淳 (1947) 「進路」
参考：『司馬遷』 (1943) 「東洋思想選書」
『滅亡について』 (1848) 「花」
『風媒花』 (1952) 「群像」
『ひかりごけ』 (1954) 「新潮」

生きていくのは案外むずかしくないのかも
しれない

武田泰淳の『蝮のすゑ』は昭和二十年八月から昭和二十一年まで上海でうろろしていた亡国の民を描いた小説である。

主人公の杉は代書業をはじめた。中国語の書類をつくる商売であった。戦争で負けても生活はつづいている。雑多ななやみを持ち込む依頼者はたえない。杉はもはや理想もなく、信念もなく、ただ生存しているだけだが、それでも生きていくのは案外むずかしくないのかもしれない、と思う。

依頼者の一人として美女があらわれる。夫が病気で寝ている、軍の宣伝部にいた辛島という男につきまとわれている、杉の詩をよく読んでいる、守ってちょうだいね、などという。「好きだよ。もちろん君が好きだよ。だけどたぶん、守れないよ。守ることはたぶんだめだよ」と杉は答えた。

武田泰淳が中日文化協会に勤めるため、上海に渡ってきたのは昭和十九年六月、『司馬遷』が東洋思想叢書の一冊として日本評論社より刊行されたのはその前年の昭和十八年四月である、

「司馬遷は生き恥さらした男である」という冒頭の文は司馬遷だけでなく、三十一歳、逮捕歴、転向歴、兵隊歴（昭和十二年十月から昭和十四年十月まで）ありの作者自身にもあてはまる。おそらく現在まで生きのびて、年金を支給されている高齢者のほとんど全員にもあてはまるだろう。



司馬遷

映画文学人生論

士人として普通なら生きながらえられるはずがない場合に、この男は生き残った。口惜しい、残念至極、情なや、進退谷（きわ）まった、と知りながら、おめおめと生きていた。腐刑（ふけい）と言ひ、宮刑（きゅうけい）と言ひ、耳にするだけにけがわらしい、性格まで変るとされた刑罰を受けた後、日中夜中身にしみるやるせなさを噛みしめるようにして、生き続けたのである。そして執念深く「史記」を書いていく。

『司馬遷』自序によれば、武田泰淳は学生時代から漢学というものに反感を持っていたという。つまり、つまらないと。しかし「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざるべからず」という事実、夏目漱石が悩まされたのは明治三十三年。その約四十年後に日本は英語に所謂文学の諸国との戦争をはじめた。言論の自由はない。

泰淳は漢学に文学のよりどころをもとめるしかなかった。『史記』から「まるで喪家（そうか）の狗（いぬ）のような人がいますよ」と云われた孔子や、首陽山に隠れ、蕨を采って食べ、遂に餓えて死んだ伯夷、叔斉や「憂愁、幽思して離騷を作った屈原などへの共感を示すことにより生き恥をさらしながら辛うじて文学者の面目を守った。

ドブに落ち枯木浮かざる街に住む 武田泰淳